

## エステル記 7 章、8 章

### 7 章

#### 7 章の背景

自分の民族ユダヤ人を救うため、決死の思いで王に直訴したエステル。神のはからいにより、王の好意を得ることができ、自分のいのちが助かっただけでなく、王から願いをかなえてやろうとも言われた。その時にすぐに自分の願いを王に話すのではなく、自分の宴会に王とハマンと二人だけで来て欲しいと言った。最初の宴会でも、エステルは自分の願いを言わず、次の日にまた宴会をするので、それに来ていただければ、その時に王様の仰せのとおり、自分の願いをお話しすると約束した。

さて、その夜、神の守りの手が働き、モルデカイの功績が王の知るところとなり、ハマンとモルデカイの間の形勢が一挙に逆転することとなる。

ハマンは妻・友人と更なる謀議をする暇もなく(まるでお手上げというのが実情だったが)、「彼らがまだハマンと話しているうちに、王の宦官たちがやって来て、ハマンを急がせて、エステルの設けた宴会に連れて行った。(エステル6:14)」と、神のわざが急ピッチで進んでいく。

そして、7 章 1 節へ……

#### 対決の時(showdown)

1.王とハマンは王妃エステルの宴会にやって来た。

2.この酒宴の二日目にも、王はエステルに尋ねた。「あなたは何を願っているのか。王妃エステル。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」

「7 章の背景」に書いてあるいきさつから、「王とハマンは王妃エステルの宴会にやって来た」。しかし、王だけでなくハマンもこの時点では、エステルとモルデカイの関係を知らないはず。

「この酒宴の二日目にも」と書かれているのも、その前の日に行われたエステルと王、ハマン 3 人の宴会が行われ、次の日にエステルが自分の願いを言うと言った、その宴会のことが言われている。王がエステルに尋ねた内容である。「あなたは何を願っているのか。王妃エステル。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」は、初日にも王がエステルに言った言葉と同じ(5 章 6 節)。実は、エステルが決死の思いで王に直訴した時にも王は同じ内容のことをエステルに言っている(5 章 3 節)ので、これで 3 回目だ。日本語なら、三度目の正直と言う言い回しがあるが、聖書の中にも 3 という回数も多く出てくる。「神から来る確かさ」を表している場合が多いように思える。ここでも、確かに王は、エステルに願いをかなえてくれるのであろう確かさ、神の時がきたことが、エステルにもわかったであろうと思

われる。

### エステルへの答え

3.王妃エステルは答えた。「王様。もしも私があなた様のご好意を受けることができ、また王様がよろしければ、私の願いを聞き入れて、私にいのちを与え、私の望みを聞き入れて、私の民族にもいのちを与えてください。

4.私も私の民族も、売られて、根絶やしにされ、虐殺され、滅ぼされようとしています。私たちが男女の奴隷として売られるだけなら、私は黙っていたことと思いますが、そうはいきません。その迫害する者は、王のお受けになる損失を償うことはできないのですから。」

ようやくエステルは自分の願いを話し始めるために、口を開く。しかし、エステルはあくまでも、控えめな話し方をしている。「王様。もしも私があなた様のご好意を受けることができ、また王様がよろしければ、私の願いを聞き入れて」。まずは、王様の好意を得られているのなら、という条件。そして、王様が良いと考えているのなら、という条件。

次に、実際にお願いをするのだが、それも「いのち」という必要最低限度のお願いしかしていない。多くの願いをしてはいない。極めて控えめなお願いだ。自分のいのちを助けてほしい、いや自分が所属する民族が「売られて、根絶やしにされ、虐殺され、滅ぼされようとしてい」るので、いのちを与えてほしいと訴えている。「ユダヤ民族」のいのちを助けてほしいとも、まだ言っていない。ただ、「私と私の民族」を助けて欲しいとだけのお願い。はっきり言わなかったことで、更に王が知りたいと言う気持ちが増大したのではなかろうか。

「売られて」で、思い出すが、ユダヤ民族皆殺しの費用をハマンがポケットマネーで払ったこと。単純に「奴隷として売られるだけなら、私は黙っていた」けれど、完全なる根絶やしには黙っていることがいられなかったことをエステルは、穏やかにではあるが、切々と、王に訴えている。

それにその理由がまた意味深。神を信じる者ではない王が、エステルの言う「その迫害する者は、王のお受けになる損失を償うことはできないのですから。」の意味を理解することはできたのだろうか？アブラハムが最初に神から呼ばれた時の言葉は、こうであった。「創 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」「迫害する者」ハマンは、この神の約束に書かれている「呪う者」のすることを、クセルクセス王にさせようとしているが、その結果である損失を受けるのは、ハマンだけではなく、気づかずに命令を出してしまった王にまで損失がくる。この損失は神から来るのであるから、ハマンごときが償うことはできないのは明らかだ。

## 王の反応

5,クセルクセス王は王妃エステルに言った。「そんなことをしようと心に企んでいる者は、いったいだれか。どこにいるのか。」

6,エステルは言った。「迫害する者、敵とは、この悪人ハマンです。」ハマンは王と王妃の前で震え上がった。

7,王は憤って酒宴の席を立ち、宮殿の園に出て行った。ハマンは王妃エステルにいのち乞いをしようとしてとどまった。王が彼にわざわいを下す決心をしたことが分かったからである。

8,王が宮殿の園から酒宴の広間に戻って来ると、エステルのいた長椅子の上にハマンがひれ伏していたので、王は言った。「私の前で、この家の中で王妃までも辱めようとするのか。」このことばが王の口から出るやいなや、ハマンの顔は青ざめた。

9,そのとき、王の前にいた宦官の一人ハルボナが言った。「ちょうど、王に良い知らせを告げたモルデカイのためにハマンが用意した、高さ五十キュビトの柱がハマンの家に立っています。」すると王は命じた。「彼をそれにかけてよ。」

10,こうしてハマンは、モルデカイのために準備しておいた柱にかけられた。それで王の憤りは収まった。

エステルの言葉を聞いた王は、そんなことがあるとは露知らず、だったのであろう。それで、「そんなことをしようと心に企んでいる者は、いったいだれか。」と言っている。しかし、ハマンは心に企むだけではなく、着々と実行に移していたのだが。

これに対し、エステルは。「迫害する者、敵とは、この悪人ハマンです。」ときっぱりと答えている。ハマンのことを、「敵」「悪人」と呼んでいる。

これを聞いたハマンは、震えあがり、王はカンカンに怒って、さすがに王妃エステルの前で感情の爆発を見せたくなかったのか、パーティー会場から退席して、怒りを鎮めるために宮殿の庭に出ていった。

一方ハマンは、エステルに対し命乞いを始めた。しかし、これがまた良くなかった。貧すりゃ鈍するだ。王が再び戻ってきた時に、逆に王妃エステルを辱めていると勘違いされてしまう。

更に怒り心頭になっている王に対し、宦官の一人ハルボナが、モルデカイをかけるために用意した柱がハマンの家に立っていることを伝える。高さ五十キュビトの柱は目立ったであろうから、何のために作ったかと言う噂が一日も経たずに広まり、宮殿の中にいる宦官の耳にも届いたのであろう。王にそれとなく、宦官ハルボナは処刑方法を提案。

この提案を王は受け入れ、ハマンをハマンが用意した柱にかけるように命じた。

かくして、ハマンは自らモルデカイを殺そうとして準備しておいた柱に自分がかけられることとなった。しかも、それによって王の憤りが収まったという皮肉。悪事は長続きしない。

## 8 章

### 王に謁見したモルデカイ

1,その日、クセルクセス王は王妃エステルに、ユダヤ人を迫害する者ハマンの家を与えた。モルデカイは王の前に来た。エステルが自分と彼との関係を明かしたからである。

「その日」とは、ハマンが柱にかけられ処刑されたと同じ日、クセルクセス王は王妃エステルに、ユダヤ人を迫害しているハマンだけでなく、ハマンの家、つまりハマン一族をも与えた。エステルが王に望んだのは、自分のいのちと自分の民族のいのちであったが、王はそれ以上の物をエステルに与えた。

王は、モルデカイがユダヤ人であることは知っていたし、おそらくエステルがユダヤ人であることもようやくわかったのであろうが、モルデカイがエステルの養父であることを、この時に明かしたのであろう。それで、モルデカイは王に謁見することに。

2,王はハマンから取り返した自分の指輪を外して、それをモルデカイに与え、エステルはモルデカイにハマンの家の管理を任せた。

王はこれまで、全権をハマンに任せていたのだが、それを実行する指輪を取り返し、今度はそれをモルデカイに与えた。完全に形勢は逆転した。また王からエステルはハマンの家を与えられたが、エステルはその管理をモルデカイに任せた。

### ユダヤ人皆殺し令を相殺する新たな法律

3,エステルは再び王に告げて、その足もとにひれ伏し、アガグ人ハマンがユダヤ人に対して企んだ、わざわざとその計略を取り除いていただきたいと、泣きながら嘆願した。王からハマンの家を与えられたエステルだが、それだけでは、ユダヤ人皆殺し令をストップできない。そこで、次にエステルは、その法令を何とかしてもらうために、王に願った。ここで、エステルは、「アガグ人ハマンがユダヤ人に対して企んだ、わざわざとその計略」と言っている。結局のところ、ハマンもペルシャの人間ではなかった。3章で、アガグ人がエサウの子孫のアマレク人の子孫ではないかということ話を話した。昔からの因縁的対決だ。

4,王がエステルに金の笏を差し伸ばしたので、エステルは身を起こし、王の前に立って、

5,言った。「もしも王様がよろしければ、また私が王様のご好意を受けることができ、このことを王様がもっともだとお思いになり、私のことがお気に召すなら、アガグ人ハメダタの子ハマンが、王のすべての州にいるユダヤ人を滅ぼしてしまえと書いた、あのたぐらみの書簡を取り消すように、詔書を出してください。

6,どうして私は、自分の民族に降りかかるわざわざを見て我慢していられるでしょう。また、どうして、私の同族が滅びるのを見て我慢していられるでしょう。」

「王がエステルに金の笏を差し伸ばしたので」ということは、エステルは呼ばれていな

いのちを王のところに行って、お願いをしたことが分かる。王は、エステルを助けたことを示すために、自分の笏をのばしたので、エステルは死なずに済み、自分の願いをさらに話すことができた。以前と同じで、口調は「もしも王様がよろしければ、また私が王様のご好意を受けることができ、このことを王様がもっともだと思いいになり、私のことがお気に召すなら」と控えめだが、自分の民族に降りかかる災いを見て我慢ができないと訴える。やや大胆になってきている感じ。

### 王の反応

7、クセルクセス王は、王妃エステルとユダヤ人モルデカイに言った。「見よ。ハマンの家を私はエステルに与え、彼は柱にかけられた。ハマンがユダヤ人たちに手を下そうとしたからである。

8、あなたがたは、ユダヤ人についてあなたがたのよいと思うように王の名で書き、王の指輪でそれに印を押しなさい。王の名で書かれ、王の指輪で印が押された文書は、だれも取り消すことができない。」

今度は、王はハマンではなくモルデカイに自分の印を使って好きなようにしてよいとしている。

9、そのとき、王の書記官たちが召集された。それは第三の月、すなわちシワンの月の二十三日であった。そして、すべてモルデカイが命じたとおりに、ユダヤ人と、太守、総督たち、およびインドからクシュまで百二十七州の首長たちに、詔書が書き送られた。各州にその文字で、各民族にはその言語で、ユダヤ人にはその文字と言語で書き送られた。

10、モルデカイはクセルクセス王の名で書き、王の指輪でそれに印を押し、その書簡を、御用馬の早馬に乗る急使に託して送った。

書簡が用意され全国に急使がおくられた。

11、その中で王は、どの町にいるユダヤ人たちにも、自分のいのちを守るために集まって、自分たちを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、虐殺し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪うことを許した。

12、このことは、クセルクセス王のすべての州において、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日に、一日のうちに行うようにということであった。

13、各州に法令として発布される、この文書の写しが、すべての民族に公示された。それは、ユダヤ人が自分たちの敵に復讐するこの日に備えるためであった。

14、御用馬の早馬に乗った急使は、王の命令によってせき立てられて、急いで出て行った。この法令はスサの城で発布された。

内容的には、ハマンが出したと同じことをユダヤ人ができるようにしている。自分たちを襲う民や軍隊を皆殺しにできるようにしている。以前ハマンが出したユダヤ人皆殺しの法令は、依然として効力を持っているのだが、それを相殺し、またそれをさらに凌

駕するような法令が出された。ハマンの法令は人間的な法令、肉的な法令を表し、モルデカイが出した後の法令は神の法令、つまりその効力は人間的な法令に勝る効力を持つ法令を表しているように思える。

### ユダヤ人の喜び

15,モルデカイは青色と白色の王服を着て、大きな金の冠をかぶり、白亜麻布と紫色のマントをまとして、王の前から出て来た。すると、スサの都は喜びの声にあふれた。モルデカイは王服を着、冠をかぶった。王服を着、冠をかぶることで、王に並ぶ権力を得ることに。私たちクリスチャンもキリストを着ることにより、神の子となる特権を持つことができるようになる。

青色と白色とあるが、1章での宴会の時のデコレーションの色と同じだ。大祭司の装束の色も青と白だが、「白亜麻布と紫色のマント」とあるが、白は清さ、紫は王族であることを表しているのであろうか。

16,ユダヤ人にとって、それは光と喜び、歓喜と栄誉であった。

17,王の命令と法令が届いたところは、どの州、どの町でも、ユダヤ人は喜び楽しみ、祝宴を張って、祝日とした。この地の諸民族の中で大勢の者が、自分はユダヤ人であると宣言した。それはユダヤ人への恐れが彼らに下ったからである。

モルデカイが高い地位についたことにより、これまで迫害を恐れて身分を隠していたユダヤ人たちがカミングアウトし、喜び祝った。自分たちが神の民であることを胸を張って、宣言したのである。キリストが王の王となられる時に、私たちクリスチャンも、神の子であることを宣言し、「光と喜び、歓喜と栄誉」に浴するのではなかろうか。